

本来の仏教・本来の禅

本書によって、現代日本語は禅を正しく語る書物を持った

兼子正勝

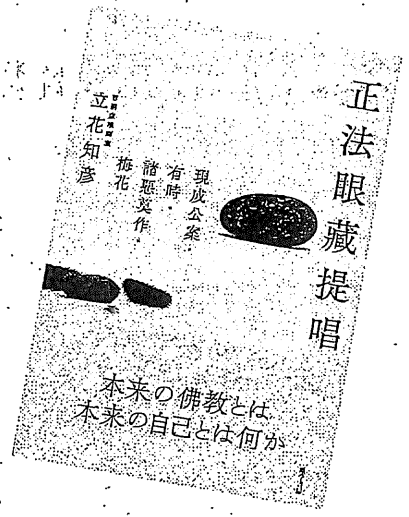
立花知彦 著

正法眼藏提唱

現成公案・有事・諸惡莫作・梅花

2・7刊 四六判216頁 本体2000円

発行：唯学書房／発売：アジール・プロダクション



本書はむずかしい書物である。書かれている内容や言葉がむずかしいというわけではないが、書かれる際の立ち位置が、禅や『正法眼藏』について書かれた他書とすこしばかり違っているために、読み方によっては非常にむずかしいと思われるかもしれないのである。

本書は、序と書いてある三つの短い文章と、道元禅師『正法眼藏』の『もも四巻』について「提唱」(提言)を提示して説法することから成っているが、「提唱」部分の冒頭は「たゞは次のようにはしてしまつてゐる。」

『正法眼藏』本文「諸法の仏法なる時節、すなはち迷悟あり、修行あり、生あり死あり、諸仏あり、衆生あり。」

「本来の自己」という言葉であらわれ、それがどうやら「意味」や「概念」から離れたところにあるものとして示され、また最後の「正法眼藏とは」では、道元禅師の『正法眼藏』が修行僧に対して語られたものであり、したがって「意味」や「概念」を離れた「本来のこと」を説くものであって、これを「思想」や「考え」方として読んではならぬことが語られる。

『正法眼藏』は日本史上もっとも深い思索を結実させた書物のひとつである。衆目の一致するところだが、多くの場合不幸にして「思想書」として読まれてきた。たとえば近年の非常に高いレベルの達成として挙げることができ森本和夫著『正法眼藏』(筑摩書房、二〇〇三、二〇〇五年)は、先に言及した「現成公案」の冒頭について、「諸法の複数性と「仏法」の単数性がそれぞれ通常の数・複数を超えたものであることを指摘した後、次のように述べる。「そのような超無限的な複数のものが絶対普遍的な全一にはかならずない。在り方こそが、冒頭の一句によって語られている。刮目して読まれるべきものである。」(現代思想・インテリゲンシア論)

ここに立花師は「実法」というものはない。座禅というものはないのだ。「以て、私を否定するのが仏教ではない」「までの提唱を添える。「仏法」を前提として「さうして」の道元禅師の言葉に対して、「実法」というものはない」といふ提唱は、少々くどくど表面的には真反対のことを言っているように見える。これは説明なのだろうか。解釈なのだろうか。「本文」に対して何か文章が添えられた場合、それが「解釈」であつたり「意見」であつたりすることになる。提唱は私たちが「提唱」の立ち位置はけつしてわからず、いふものではない。この書物がどのような立ち位置で書かれているのか。実は冒頭の三つの短文がそれを説明している。最初の「仏教」とは「は、釈尊が修行を経た悟りを開いたこと、悟りを伝えようとする弟子たちを説法をはじめたことが仏教のはじめである」とが確認され、今日の仏教の多様な姿のなかで、「本来の仏教がさうである」といふ積尊が理解したもの(つまり積尊が理解し身についていた)弟子たちも理解し身についていた)を追求するのが禅である。二つ目の「座禅」とは「は、その積尊が「理解し身についていた」が仮に「言葉」であり「概念」である。「絶対」にしても「全一」にしても、「絶対」なるものとの差別化のなかで区切られ、区切られた考え方であつて、区切る「私」がそこに根を張っている。そんなものから離れなからずと禅は言うのであつて、たとえば道元禅師は、古経典から「諸惡莫作、衆善奉行」の一節を取り出して提唱するとき、「悪」のことをしてはならぬ、衆の善をおこなひなからぬ」という通常の理解から私たちを引きがすようにして、「悪とは何か、善とは何か」とたたみかけ、「悪も」善も概念として成立しないような境域を展開するのであつて、本書「諸惡莫作」の提唱も、私たちの耳に親しい現代日本語で同じ趣旨を展開している。